
壊れた旋律を奏でるモノは～STAR DRIVER～

[link](#)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

壊れた旋律を奏でるモノは、STAR DRIVER

【Nコード】

N3153P

【作者名】

link

【あらすじ】

ねえ、きみの本当にしたいことってナニ？

序章 オモイ

全てをつつみこむような漆黒の ソラ

病気であるかのように青白い ツキ

永遠のように輝き続ける ホシ

どこからともなく押し寄せる ナミ

あてもなく駆け抜けていく カゼ

自分勝手に流れ続ける ジカン

そこに居座る ワタシ

小さく開いた口から漏れる タメイキ

無意識に流れ落ちる ナミダ

したくても声にならない ヒメイ

徐々に身体を蝕む心の キズ

誰にも言えない ヒミツ

誰にも聞こえない コエ

誰にも見えない セカイ

誰にも分からない イタミ

誰にも、誰にも、誰にも・・・

序章 プロローグ

多くの星が瞬く春の夜

そこで出逢う1人の少年がいままでの、そしてこれからの運命をいとも容易く変えてしまう

波打ち際の流された1人の少年

燃えるような赤い髪

呼吸をしていない身体

その少年に近づき助けるわけでもなくしゃがみこむ1人の少女

少女は意識の無い少年の耳元でささやく

ねえ、楽しいこと、始めるんでしょ？

謎めいた微笑と予言めいた言葉を残し、浜辺で倒れた少年の元から立ち去る1人の少女

そのあと、すぐ他の男女2人が駆け付け、人口呼吸を始める

辺りは、夜空に輝く星々からの光でほのかに照らされている

しかし、さっきまでいた少女の姿はもうない

跡形もなく、気配さえも・・・

第1章 キミの瞳に映るモノ

―南十字学園高等部―

「ワコー!?!」

「おはよう、レンカ。今年も同じクラスだね。」

「うん!?!」

と言い、黄色のショートヘアのアゲマキ ワコに抱きつく限りなく白に近い紫のロングヘアのアメヤ レンカ。

「今年もよろしくね。レンカ。」

「に!?!」

と、アメヤ レンカは顔全体で笑い、さらにきつくワコに抱きつく。

「ちょっと、レンカ、苦しいってば!?!」

「苦しい・・・?」

レンカはまるで何も分らないという風に首をかしげる。

ワコは、腕の力が緩んだ一瞬の隙について、レンカの腕から脱出する。

「ワコ、苦しいって・・・？」

「うっん、なんでもないんだよ。」

ワコは、笑顔をつくり、レンカの言葉を否定する。

すると、背後から、

「ワコー！！今年も同じクラスだね！」

と、マキナ ルリがやってきた。

その声を聞くや否や、レンカはワコの後ろへと逃げる。

「ルリ！！今年もよろしくね。今年はレンカも一緒だよ。」

「そこにいるのは、噂のアメヤ レンカじゃん！！！」

「ちょっとルリ、噂のって・・・？」

「不思議ちゃん系で、そして、この美貌とスタイル！巷の男子の間じゃあ噂よ？」

「だって、レンカ。」

そうワコが言うが背後からは一向に返答がない。

「レンカ？ちょっと、どうしたの？……ってレンカ！？」

そこには地面にうずくまるレンカの姿が。

そして周りには大勢の男子が。

「どうしたの！？レンカ！！」

「……ワコー！！」

レンカはワコに抱きついた。

「そうか、怖かったか、レンカ。」

そう言い優しく背中を撫でる。

そして、ワコが口を開き何かを叫ぼうとしたとき、

「どうしたんだ、ワコ。」

「あ、スガタ君。レンカが取り乱しちゃって。ほら、レンカって知らない人がだめじゃん？だから。」

「そうか、大丈夫か？レンカ。」

すると、レンカは少し顔を上げた。

「だ、大丈夫、うん。」

それを聞くとスガタは群がる群衆に対して叫ぶわけでもなく一言言った。

「あまり、彼女を刺激しないでくれるかな？」

言葉と同時に放った笑顔は、周囲の空気を凍てつかせた。

そして、彼らの周りから人影は消えていった。

すると、1人の少年がこっちに向かってきた。

「どうした？スガタ・・・ってその子大丈夫なのか！！？」

「心配することはない。ちよつと発作を起こしただけだから。」

「よかった。んで、また会ったね、ワコちゃん。」

と、ツナシ タクトは右手を上げる。

「よつ。」

と言って、ワコも手を上げる。

「その子は？」

タクトが尋ねる。

「この子は、アメヤ レンカ。わたしたちの幼馴染なんだよ。」

「レンカちゃんか・・・。よろしく。俺はツナシ タクト。」

「ツナシ・・・タクト・・・。・・・タクちゃん！！」

「・・・へ？タクちゃん？」

「良かったな、タクト。普通は初めての人には絶対にも言わない
レンカが、君にあだ名をつけるとは・・・ハハハ。」

お腹を抱えて笑いだすスガタ。

「そ、そんなに驚くようなことなのか？スガタ。」

「レンカが人にあだ名なんて付けたのは初めてだ。」

「レンカはタクト君のことが気に入ったんだね。」

「に！！」

「よろしく、レンカちゃん。」

「レンカ、でいいよ。タクちゃんなら。」

「それって、俺やワコはレンカって呼んじゃダメってことかな？」

と、スガタがいじわるそうに笑いながら言った。

「え、あ、スガタやワコは当たり前によくって、えーと、タクちゃんは、なんというか……。」

しどろもどろになりながら必死に弁解をしようとするレンカ。

「大丈夫、わかってるよ。」

「だったら、そんなこと言わない！アメヤ、混乱するんだから！」

そう言い、頬を膨らますレンカ。

「レンカって一人称は名字なんだ。」

「珍しいでしょ？またそこが、レンカのかわいいところもあるんだけど。」

ワコがレンカに頬ずりをする。

「ちょっと、ワコ、痛い。」

「あー、ごめんごめん。あんまりにもレンカがかわいくて。」

「そんなこといっても何も出ないんだから。」

「知ってる。レンカは今のままでいいんだよ。」

「にへへ。」

「・・・レンカ？あんまりそんな笑い方はしない方がいいと思うけど・・・？」

「じゃあ、にひひ。」

「それも・・・。」

「じゃあ・・・。」

そんなやり取りを傍目に見ながらスガタとタクトは話す。

「気に入ってくれたかな？」

君が思うような青春を謳歌できるところかい？」

「ああ、気に入った！この島で青春の３年間で謳歌する！」

「それは良かった。ワコモレンカも君のことが気に入ったみたいだし。」

「どんなことがこの島にはあるんだろう。一体どんなできごとが起こるんだろう。」

期待に目を輝かすタクト。

それを見て微笑むスガタ。

いつものようにじゃれあうワコとレンカ。

4人を取り巻く運命の歯車が今、廻り始める。

.

放課後となり、ワコ、スガタ、レンカの幼馴染3人組にタクトが加わった4人で学校を後にしていた。

「ねえねえ、街に行かない？」

ワコが提案する。

「ワコは街に行くのがほんと好きだな。行こうか？」

スガタはそう言いながらも、嫌ではない様子だ。

「あ、ごめん、俺、寮だから帰らないといけないから、ちょっとむりだわ……。」

「そっか、タクト君は寮なんだよね。じゃあ、また今度にする？」

「いや、俺抜きで楽しんできなよ。ね、レンカ？」

突然タクトはレンカに話を振った。

「へ？な、何のことなの？」

「俺が寮に帰るから、みんなで街で遊んできなよってこと。」

「だ、だめだよ。タクちゃん抜きで遊ぶのは……！」

「めずらしいな、レンカが引き留めるなんて。」

「スガタ、そんなに珍しいことなのか？」

「まあな。普段はレンカはあんまり人とかかわらないから。」

レンカはというと、じっとタクトを見つめて・・・というか睨んでいる。

「タクちゃん抜きで遊びたくはないんだから!!」

「レンカ？それってわたしたちのことが嫌いってこと・・・？」

ワコがレンカの背後に回って肩にそつと手を置きながら言った。

すると、レンカはびっくりしたように身体を1度震わせると、目に涙をためながら振りかえった。

「う・・・、ワコー、驚かさないの・・・。」

「だって、レンカがそんなにタクト君に執着するから、あたし、寂しくって。」

「し、してないよ！ただ、タクちゃんもいた方が楽しいかな、って・・・思ったただだから・・・。」

「分かってるよ。レンカが可愛いからこんなことしたくなるだけ。」

「嘘言わないの!!」

「はいはい。」

ワコとレンカの会話を傍目にタクトはつぶやく。

「ほんと、この島に来てよかったよ。」

すかさずスガタはタクトの言葉を聞き取った。

「タクト、君にとっての幸せって何かな？」

「・・・スガタ？」

「あ、ああ、何でもない。気にしないでくれ。」

いきなり、突拍子のないことを聞いてくるスガタに疑問を覚えながら、タクトは腕時計に目をやった。

すると、時計の針は既にタクト自身決めていた時間よりも、大幅に進んでいた。

「俺、もう帰らないと！じゃ、またあしたな！！」

「タクちゃん、ちょっと待って。」

急いで帰ろうとするタクトをレンカが呼び止める。

「レンカ、どうしたの？」

「今日は気をつけるのね。」

何か大変なことに巻き込まれるかもね。」

「・・・レンカ？」

「ワコも気をつけるのね。じゃ、アメヤは帰るね!」

レンカはそれだけ言うと、さっさと帰ってしまった。

残されたのは、わけもわからないタクトと、スガタとワコ。

「レンカって、いつもあんなこと言うの?」

「たまにね。でも、よく当たるんだよ!」

「タクトもワコも、今日はおとなしくしておいた方がいいかもな。」

「スガタ君?それってあたしはいつもまんちゃだってこと?」

「自覚があるんだな。」

「そ、そんなことはないよ!」

「ワコは元気なくらいがいいんじゃないかな?じゃ、俺、帰るわ。」

「気をつけてね!」

「またあしたな。」

3人はそれぞれの家路に着いた。

その夜

気多の巫女の封印が解かれ、サイバディはゼロ時間内で活動ができ

るようになった。

そして、島に流れ着いた少年、ツナシ タクトはシルシを持った銀河美少年としてサイバディを操ることとなった。

（本当にしなければならぬことに直面した時・・・ねえ。）

1人の少女は全ての物の動きが止まった街を歩きながら呟いた。

物語はまだ始まったばかり

間章

薄暗い部屋に2人の男女

「ねえ、お兄ちゃん。」

「なんだい？」

「ううん、なんでもない。」

ただ呼びたかっただけ。」

少女は微笑む

「は僕のこと、嫌いかい？」

少し少女は驚く

「ど、どうして？嫌いになんかならないよ。」

お兄ちゃんのこと好きだよ？」

少年は真剣な眼差しで言う

「大事な妹は誰にも傷つけさせない。」

「どうしたの？今日のお兄ちゃんいつもと違う。」

顔を曇らせる少女と微笑む少年

「なんでもないよ。ほら、は家に帰らないと。」

「・・・まだここにいちやダメ？」

名残惜しそうに少年を見つめる

「今日はこれから人が来るんだ。ごめんね、」

「お兄ちゃんは謝らないで。わがままなのは私の方だから。」

「じゃあね、お兄ちゃん。」

薄暗い部屋には少年が1人

第2章 音なき叫び

「レンカの言ったことって本当に当たるんだな。」

タクトは目を輝かせながらワコとスガタに言った。

「だから言ったでしょ？ 気をつけてって。」

「そういうワコも昨日は大変だったな。」

「確かに・・・、封印が解かれるなんて思ってもいなかったし、何よりタクトくんが銀河美少年だったとはね・・・。」

「俺もびっくりだったよ。じいちゃんが“やりたいこととやるべきことが一致した時、世界の声が聞こえる”って言ってた意味が分かったよ。」

「これから、タクトは気をつけた方がいいかもな。」

「何話してーるの？」

「うわっ、レンカびっくりするじゃない!!」

レンカの突然の登場に驚くワコ。

「にー。タクちゃんとスガタは驚いてないよ？」

「な、なんで驚かないの!？」

「だって、なあ？」

タクトはスガタに視線を投げる。

「俺らにはレンカの姿、見えてたから。」

スガタもタクトに視線を投げる。

「もう！だったらタクト君もスガタ君も教えてよ！！」

「アメヤが教えないでって頼んだのね。だってそっちの方がおもしろいの。」

満面の笑みでレンカは言う。

「レーンカーー！！」

「タクちゃん！スガタ！ワコが怒った！！」

「いくらタクト君たちにすがったって、あたしは容赦しないからね！！」

そういつて、ワコはレンカに飛び付こうとした。

だが、それはタクトによって遮られた。

「まあまあ、ワコもレンカも落ち着いて。それにしても、朝から2人ともテンション高いね。」

「そう？普通なのね、このくらい。」

「・・・スガタは大変だったんだな。」

「小さい頃から一緒だと慣れるよ。」

スガタは涼しい顔でワコとレンカを見ながら微笑んだ。

「あ、タクちゃんたちって何話してたの？」

「それは・・・、少し人が多くなってきたな。タクト、放課後空いてるか？」

「空いてるけど。どうして？」

「いや、俺らの入っている部活に招待しようと思ってね。そこなら今の会話も落ち着いてできる。それに、」

スガタは横目でワコとレンカを見る。

「君が来ると喜ぶ人もいるからね。」

「ちょ、ちよつとスガタ君！！何言ってるの！？」

いきなりのスガタの発言に慌てふためくワコ。

「だれもワコのことだとは言っていないんだけどな。」

「あ・・・。」

顔を赤らめてワコはしぼんでいく。

「俺を歓迎してくれるんだ。」

「当たり前なのね！タクちゃんは大切な友達なんだから！！」

「ありがとう。レンカ、ワコ。」

ワコとレンカは満面の笑みで頷いた。

” 車輪だ、車輪だ、大きな車輪だ、”

” 僕が、僕が利用するはずだったその大きな車輪に、潰されようとしている”

校舎の奥からはよく通る芯の強い声が聞こえる。

タクトとスガタはその声の聞こえる部屋へと足を踏み入れた。

そこには、青いネクタイをした一人の少女が役を演じていた。

スガタは手を叩きながらその少女の元へと向かう。

「タクト、彼女は3年のエンドウ サリナ部長。」

「ツナシ タクトです。」

「演劇部、夜間飛行へようこそ。へえ、美少年オーラでてるじゃない。」

舞台映えしそう。」

エンドウ サリナ部長はそう言ってタクトを見た。

そして、

「君、サイバディを動かせるんだって？」

と言った。

「ええ、まあ。」

「シルシ、見してくれないかな？」

サリナは言った。

タクトは、制服のネクタイをはずして、シャツのボタンを開いた。

そして、目を閉じ、傷跡と同じ場所にあるシルシを光らせた。

「珍しいわね、シルシと同じ場所に傷があるなんて。」

そう言いながら、演劇部女子5人、ワコ、サリナ、タイガー、ジャガー、レンカはじっと見る。

「そ、そろそろいいかな？」

いくら男子でも、あまり見られたくないものらしい。

タクトは、ネクタイを結びながら言った。

「あんたら一体何者？」

その問いに対し、サリナは首をかしげて微かに笑いながら言った。

「演劇部よ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3153p/>

壊れた旋律を奏でるモノは～STAR DRIVER～

2011年3月24日16時35分発行